

～対話型鑑賞ワークショップ at manabiai school～



■日時・会場

2012年7月16日（月） 13:30～17:00

manabiai school : <http://www.manabiaischool.jp/>

■参加者

12名

■ナビゲイター

VTSJ受講者 岡崎大輔

■開催目的

- ・医療関係者の依頼を受け、医療現場における対話型鑑賞の可能性を模索する。
- ・企業をはじめ、様々な組織における関係性づくりに対話型鑑賞をどう活用できるか模索する。

■シークエンス（使用作品）

作品1

「Sybil with Colleen and Will」

Jessica Harper 2006年

作品2

「Maternity Waiting Room」

Norman Rockwell 1946年

作品3

「An April Evening」

Helen Hyde 1910年

■プログラム概要

・ウォームアップ

対話型鑑賞を全く経験したことがない鑑賞者のため、「みる」「考える」「話す」「きく」のプロセスを簡単にレクチャーした後、作品鑑賞へ。

・作品鑑賞

1作品あたり約30分鑑賞。1作品ごとに約20分間の休憩をはさみ、自由な雰囲気の中で鑑賞の感想や、お互いの属性について話していただく時間とした。

・レクチャーおよびディスカッション

鑑賞終了後、対話型鑑賞でもたらされる効果（批判的思考力・観察力向上、チームビルディング）について簡単にレクチャー。その後、作品鑑賞体験を振り返りながら、対話型鑑賞に関する質疑応答や各人の現場で対話型鑑賞がどのように活用できるか意見交換。

■参加者からの質問・感想

・どんな効果が期待できるのか？

・自分の現場でもやってみたいが、これは“対話型鑑賞”以外の名称で場を開くことはできないか？（タイトルが少し硬い）

・医療現場で何とか使いたい、活用事例はあるか？

・実施後の効果検証はどうやって行うのか？

・自分もやりたいがファシリテータとして何が求められるか？

・多様性を言葉だけでなく、体験を通じて感じられた。

・全員が同じ立場で話すことができるため、関係性構築に活用できると思った。

・管理職研修に使うのは有効だと思った。

・ナビゲイターから話を聞いて面白そうだと思っていたが、想像以上だった。

・アート作品鑑賞に興味があって参加したが、コミュニケーションにおいても得るものがたくさんあった。

■ナビゲイター所感

私が開催する鑑賞会は、「アート作品鑑賞」よりも「学びの場」というフレーズに興味をお持ちの参加者が多く、ご要望としては鑑賞作品の知識を得るよりも、対話型鑑賞がどんなところで、どのように活用できるか知りたい、というお声がほとんどである。今回の鑑賞会でも、鑑賞プロセスで起こった他者の意見によって作品のみえ方が大きく変化する、全員が同じ立場で意見を言うことができる、他者の意見をきくことでみようとしていなかったところをみようとする、といった体験をもとに様々な意見交換が行われた。

今回の鑑賞会は、アート作品とは全く無縁だった私が実践を重ねる意義について考える良い機会になったと思う。参加者が同じ体験をし、その体験に基づいてコミュニケーションに関する対話を重ねるとい、今回のような場をもっと様々な場所で行うことができるのではないかと感じた。今後も、対話型鑑賞を用いた対話の場づくりを、様々な場所で様々な方を対象として実践していくつもりである。